

(要約版)

スポーツバーにおける飲酒コミュニケーションを介した 地域に根差すファンダムの形成過程に関する調査研究

木村宏人 (千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程・社会学)

1. 研究目的

本研究の目的は、いかにしてプロ・スポーツチームの応援と人々が抱く地域意識が結び付くのか、スポーツバーにおける飲酒コミュニケーションに注目して明らかにすることである。文部科学省の第2期スポーツ基本計画には「地元スポーツチームの観戦・応援などにより、スポーツによる地域一体感の醸成と非常時にも支え合える地域コミュニティの維持・再生を促進する」(文部科学省 2017: 23)とある。住民どうしが支え合える地域コミュニティの形成に向け、スポーツ観戦・応援を通して地域が一体となるような意識の醸成が期待されている。これまでの筆者の研究で、地元のプロ・スポーツチームを応援することと住民の抱く地域意識には実際に関連があることが統計的な社会調査によって明らかになっている。では、プロ・スポーツの応援と地域意識はなぜ結び付くのか。本研究では、欧米のファン研究で用いられるファンダムという視点を導入し、またスポーツバーを調査することで、この問いを明らかにする。

2. 研究方法

2021年の4月から、スポーツバーおよびそこに来店しているプロ・スポーツのファンを対象に観察を行った。そして長野県松本市で松本山雅FCを応援し、スポーツバーを利用するファン4名を対象に半構造化インタビューを実施した。松本山雅FCは、現在Jリーグに所属するプロ・サッカークラブであり、地域の人々から厚い支持を集めていることで知られている。インタビュー調査による聞き取りと分析によって、ファンの行動と内面の関係を詳しく調べた。

3. 研究成果

松本山雅FCのサポーターが行う応援と地域意識がどのように結びつき、その結びつきを支えている条件を明らかにした。まず、松本山雅FCを応援する土台となるような地域意識の抱き方があった。その意識には対自的な意識と対他的な意識がある。対自的な意識が応援の土台となるには、松本市の出身である(あるいは長く住む)という個人の経験が前提条件となっており、県外出身者にとってそのような意識の持ち方をすることは難しかった。後者の対他的な意識が応援の土台となるものについては、「あいつら」と「われわれ」という想像的な集団を想起させる機能があり、個人的なものではなかった。しかしここにはサッカーに無関係な地域の逸話がサッカーに持ち込まれるという構造があり、やはり松本市の出身であること(あるいは幼児期の社会化)が大きな意味を持っていた。

しかし、後者に関して、信州ダービーとしてサッカーにまつわる対立が蓄積されることで、対立関係がサッカーに無関係な逸話に還元できるものではなくなっていく。つまり地域の逸話がサッカーに持ち込まれての対立という構造が変化し、クラブ、ファン、地域が一体となっ

て「あいつら」と「われわれ」を形成する構造になった。そしてその変化によって、松本市出身ではなく元々対他的な地域意識を持たないファンもその対立関係に参加することが可能になった。

そして元々対他的な地域意識を持たないファンが、その対立関係に参加し地域意識を醸成する空間としてスポーツバーが重要な役割を持っていた。スポーツバーは、試合観戦後、サポーターたちが集まり、お酒を飲みながら、松本という地域に関するだけでなく、サッカーについて、松本山雅 FC について、知識や振る舞いを伝え合う場所になっている。スポーツバーで、知識や振る舞いを教え、教えられるなかで、ダービーに関する対他的な感情も醸成されていた。

4. 考察

考察では、ファンダムという視点から、分析結果を理論的に解釈した。松本山雅 FC のサポーターは、ダービーをめぐって、Jenkins (2012) のいう「解釈の共同体」としてのファンダムが形成されていると理解できる。つまり、松本山雅 FC のサポーターである「われわれ」として、ダービーをどう解釈するかの期待を共有し、実行している。松本市出身かどうかにかかわらず、「あいつら」としての長野および AC 長野パルセイロと対他的に向き合うことこそが解釈の共同体としての「われわれ」松本山雅 FC サポーターに期待されることである。

そしてそうした解釈の共同体の一員になるための空間が、スポーツバーである。これまでの経緯や知識を得て、ふるまい方も含めて解釈の共同体の成員から学び、その一員になっていく。そして元からの成員も改めてその知識を思い出し、繰り返し松本山雅 FC サポーターとしての振る舞いを行うことを通して、共同体を強固にしていく。松本市出身であるかにかかわらず、松本山雅 FC サポーターとして解釈の共同体の形成と再確認が繰り返される空間がスポーツバーであるといえるだろう。

5. 結論

調査の結果、ダービーにおける対他的な地域意識については、地元出身者ではないファンにも共有されていること、そしてその対他的な意識は、スポーツバーにおける知識と振る舞いについてのやりとりを通して形成される解釈の共同体の一員になることで醸成されていることがわかった。

ファンダムという視点からプロ・スポーツチームのファンをとらえたこと、スポーツバーに注目したこと、などが本研究の意義である。